平成26年8月17日（日）

寺町旧域・法成寺跡現地説明会資料

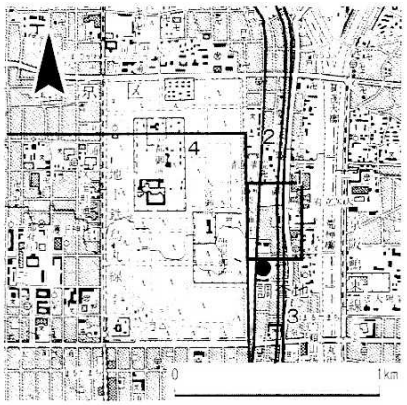
調査場所　京都市上京区寺町通荒神口下る松蔭町131他
調査期間　平成26年6月9日～8月末（予定）

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40-3
URL http//www.kyotofu-maibun.or.jp

1．はじめに

調査地は、平安時代に藤原道長により創建された法成寺の境内に位置すると想定されています。また、天正年間（1573～1593 年）に豊臣秀吉が京都市中にあった寺院を一括して移転させた寺町にあたります。埋蔵文化財包蔵地としては寺町旧域と呼称されています。

今回の発掘調査は京都府立鴨沂高等学校校舎等改築工事に先立って実施しています。南校地の敷地内で、北側に 250 ㎡、南側に 580 ㎡の調査区を設けて調査を実施しています。



第１図　調査地位置図
（国土地理院 1/25,000「京都東北部」）
1. 法成寺跡　2. 寺町旧域　3. 御土居　4. 平安京跡

2．調査の概要

①　法成寺跡

法成寺は藤原道長が寛仁４（1020）年に創建した寺院で、史料からは最大で近衛大路末（現在の荒神口通付近）を南限に、西は東京極大路（現在の寺町通付近）、東は鴨川の南北３町（約 360 m）、東西２町（約 240m）の寺域をもった藤原摂関家最大の寺院とされています。文献によると、池を中心に堂塔が配置されていたと考えられており、道長の子頼通が宇治の平等院を造る際に手本とした寺院として知られています。しかし、その実態についてはよくわかっていませんでした。

今回の調査とは別に、今年度、京都府教育委員会が鴨沂高校北校地内で実施した立会調査において、多くの瓦が出土する地層が現表土下約 2.2mから３mの間に存在することが明らかとなりました。非常に狭い面積のため、瓦が含まれる地層の性格は分かりませんでしたが、出土量の多さから、法成寺の主要部分が荒神口通より北側に所在する可能性が考えられます。

今回の当センターの調査では、寺町の整地土より下に約 1.8mにわたる砂礫の堆積が確認されました。この砂礫には、法成寺に用いられたとみられる緑釉瓦などが室町時代の土器とともに含まれていました。砂礫の堆積の観察より、鴨川の洪水に伴い、徐々に現在の地表面近くまで土砂が堆積したことがわかりました。このことから、平安時代には調査地周辺は鴨川の河川敷、もしくは河道であったと考えられます。

②　寺町旧域

秀吉は京都の都市改造を図り、天正 19（1591）年に御土居と呼ばれる大規模な土塁と堀で京都を囲みました。寺町は京都市中にあった寺院を